

『冷血』において静観すること ——語りの効果としての著者カポーティ

木村 章男

I.

ジェラルド・クラーク (Gerald Clarke) による伝記には、上訴によってペリーとディックの死刑が延期されるたびに『冷血』 (*In Cold Blood*, 1965) の出版が遅れ、いらだち失望するトルーマン・カポーティ (Truman Capote) の姿が描かれている。¹ クラークはもちろんそこには「モラル・ジレンマ」 (“moral dilemma” [Clarke 352]) があったと言う。本の出版はカポーティにとって「彼を友人また恩人として遇し、彼の方でも彼らを助け、相談に乗り、ペリーの場合には家庭教師までした、そうした二人の痛ましい死」 (“the painful deaths of two men who regarded him as their friend and benefactor, two men whom he had helped, counseled, and, in Perry’s case, tutored”) を意味したからである。こうしたカポーティの姿、本の出版のため事件の早期の決着を求め、心の底でペリーとディックの死刑執行さえ望んだカポーティの姿は、小説の中には描かれていない。「友人また恩人」として二人の人生に介入した自分の姿を、カポーティは不自然なほどに読者の目から隠している。

ただしカポーティがこの小説に全く登場しないというわけではない。明らかにその存在が前提とされる場面があり、また「ある友人」 (“a friend” [307, 320])、あるいはまた「あるジャーナリスト」 (“a journalist” [331]) として言及される場面がある。しかしこうした小説中のカポーティはクラークの描

く伝記上の、すなわち現実のカポーティとは違う。² 小説中のカポーティは二人の死刑執行の延期に苛立つことなく、ただ静観している。この静観はどこから来るのか。さらにもう一人のカポーティ、語り手のカポーティがいる。一般的にノンフィクションの語り手は自分の知識の限界を隠す必要がないため、全知全能の語り手として振舞う必要はなく、著者自身が一人称で語ることとも可能である。しかしカポーティ自身が nonfiction novel と呼んだ『冷血』の語り手は徹底して三人称で語る小説（ノヴェル、フィクション）の語り手であり、全知全能の語り手として振舞っている。基本的にノンフィクションでは語り手と著者は同じである。しかしノンフィクション・ノヴェルの『冷血』では、語り手と著者は別である。著者カポーティは巧妙に語り手カポーティの背後に隠れている。語られる出来事の場合に自分がいて当事者として関わったことを否定しているかのようである。しかし完全にというわけではない。

『冷血』の語り手は出来事を断片に分け、その断片を連ねながら淡々と語る。しかしそこに感情がないというわけではない。出来事自体がどうしてもなく感情を帯びてしまうからである。それは語り手自身の感情と区別がつかないし、また語り手の背後にいて出来事に当事者として関わった著者カポーティ自身の感情とも区別がつかない。『冷血』の語り手はクラッター家の人々を殺した二人の犯人に対して、怒りや軽蔑を感じているようには見えない。むしろ二人に対して、特にペリーに対して、哀れみを感じているようである。これは著者兼当事者カポーティ自身の感情であると考えられるが、小説の中ではそれはあくまでも語り手の感情、あるいは出来事そのものが喚起する感情として表現される。上述したように、クラークの伝記の中のカポーティは本の出版を優先するあまりペリーの死刑執行を望んでさえいた。しかし小説の中の著者カポーティはそうではない。死刑に至るペリーを、語り手の影に隠れながら哀れみをもって静かに見ている。³

本論はこの小説中の著者カポーティの静観が、小説全体を貫いているように見えるペリーについての一つの確信、ペリーは死ななければならないという確信に裏打ちされていると主張する。ただしそれは著者カポーティによって表現されてはいない。その代わり自分は死ななければならないというペリー自身の確信が、語り手によって表現されている。したがって著者カポーティの静観も、あくまでも語り手による語りの効果として読者に現れるだけである。死を覚悟しながら死にゆくペリーの姿を静観する著者カポーティの

目を、語り手カポーティの視線の中に見分けること、さらに伝記上のカポーティ、すなわち現実の著者カポーティの目とも区別すること、それが肝要となる。

『冷血』という小説は、カポーティがそれを書いたプロセス、すなわち当時に売れっ子の作家であったカポーティが、実際に起きた殺人事件に興味を抱き、現地に赴き、犯人二人と仲良くなり、その死刑に立ち会いながら、同時進行で小説を書いたという創作のプロセスが、ややもすれば小説そのもの以上に読者の関心を引くことになったという点で特異である。言い換えれば、『冷血』という小説はそれを書いた当時のカポーティ自身に関する情報、すなわち作者の伝記的要素を含めて読むことが当然となっている珍しいテキストである。『冷血』はそうしたテキストの伝記的背景、あるいはそれに対する読者の先入観のせいで、かえって複雑な語りの構造を持つことになった。読者は小説の中にカポーティの姿を見ようとし、それがゆえに語り手とその場にいたはずの伝記上のカポーティを混同し、さらに小説を書いた伝記上のカポーティと小説の中で語り手によって語られた著者カポーティを混同する。

そうした『冷血』の語りの構造に目を留め、分析した研究として二つが挙げられる。しかし二つとも現実の著者カポーティと小説の中の著者カポーティを区別していない。デイヴィッド・ゲスト (David Guest) は現実の著者カポーティと三人称の全知全能の語り手を区別し、フーコーに言及しながら、語り手の目が「客観的で、誤りのない、パノプティックな目」(“an objective, infallible, panoptic eye” [121]) であることを指摘している。一方トレントン・ヒックマン (Trenton Hickman) は「コスモポリタンのゲイ作家トルーマン・カポーティと、彼の『客観的』(すなわちヘテロセクシュアル化された、男性の) 語り手」(“Truman Capote, the cosmopolitan gay writer, and his ‘objective’ (i.e., heterosexualized, male) narrator” [128])、すなわち現実の著者カポーティと語り手カポーティを区別し、ゲストの研究に同調しながら、現実の著者カポーティの視点を panoptic で supervisory なものと考えている (122-29)。

確かにヒックマンとゲストが言うように、『冷血』には全体を統括する panoptic な目がある。本論においては、それは現実の著者カポーティの目とは区別されるべき、語り手カポーティの全知全能の目である。しかし本論が指摘するのは、この小説に何かしら真実があるとしたら、それを見据えてい

るのは語り手カポーティの目ではないということである。二人の犯罪者を、特にペリーを、その内面まで見透かしているのは、現実の著者カポーティの目でも、語り手カポーティの目でもなく、語り手の語りの中にしか現れない著者カポーティの目である。この語りの中の著者カポーティの目を創造したことが、カポーティがそれを意図したかどうかは別として、『冷血』の最大の成果である。

Ⅱ.

ペリーはかつて収監されていたカンザス州の刑務所で、教戒師ポスト師の書記をしていたウィリー・ジェイへの憧れからキリスト教信仰に興味を持つようになり、ウィリー・ジェイをモデルにしたイエス・キリストの肖像画を描いたりしたが、もう一方で自らのそうした傾向に反発し、その絵は「偽善の産物」(“a piece of hypocrisy” [43])であり、「やはり神には納得できない」(“unconvinced of God as ever”)と言い続ける。仮釈放された後、刑務所で一緒だったディックから声がかかり、ペリーはカンザス州に舞い戻る。仮釈放の条件で再びカンザス州に来ることを禁じられていたにも関わらず、である。ペリーには他に会いたい人がいたのである。ペリーはディックとの約束の日がちょうどウィリー・ジェイが釈放される時期と重なっていたことに気づき、むしろウィリー・ジェイと行動を共にすることを期待してカンザス州に来たのである。しかしウィリー・ジェイには会えず、結局ディックと行動を共にすることになる。後にポスト師に電話で聞いたところ、ウィリー・ジェイはペリーが着いたバスターミナルを五時間前に発っていた。もしこの時ウィリー・ジェイに会えていれば、ペリーはディックに誘われるがまま犯行に及ぶことはなかったはずである。ペリーはここに運命を感じる。後に事が動き出し、犯行に使うストッキングを病院の修道女から調達しようとしながら、ペリーは自分がここにいるのは「自分がここにいたいと思ったからではなく、運命がそう決めたから」(“not because he wished to be but because fate had arranged the matter” [42])と考える。語り手はペリーがもともと迷信深いたちで、「強迫的に迷信深い人は往々にして熱心な運命論者だが、ペリーが正にそうである」(“The compulsively superstitious person is also a serious believer in fate; that was the case with Perry”)と、ペリーにとって迷信、運命が大きな意味を持っていたことを指摘する。

しかし最終的にペリーを死刑に導いたのは運命ではない。それはむしろ語り手が「ペリーの神秘的道徳的気がかり」(“Perry’s mystical-moral apprehensions” [112])と呼ぶものである。⁴語り手が「ペリーの神秘的道徳的気がかり」に言及するのは、犯行後二人がメキシコに逃亡した時の様子について語る断片の一つにおいてである。ペリーはディックに「ただ考えられないというだけなんだ、あんなことをした奴が逃げられるとは」(“It’s just I don’t believe it—that anyone can get away with a thing like that” [109, 112])と、いずれ捕まり死刑になるのではないかという不安を口にしている。ディックは自らの同様の不安を隠すためペリーに黙るように言うが、語り手は「ディックは少なくとも部分的にペリーの神秘的道徳的気がかりに囚われていた」(“Dick was at least partly inhabited by Perry’s mystical-moral apprehensions” [112])と、ディックが「ペリーの神秘的道徳的気がかり」に感化され、それを宿したかのように書いている。ディックはこの後アメリカに戻ることを決心するが、その理由は持ち金がなくなり、このままメキシコにいても労賃が低く十分に稼げないからだと言う。ペリーもディックと行動を共にすることにするが、その理由は語り手によれば、「ディックから離れるのが怖かった」(“he was afraid to leave Dick” [124])からだと言う。そして「その怖れの根拠は、あるいは彼自身はそうと信じたようだが、新たに芽生えた迷信的確信、ディックと『一緒にいる』限り『起こるべきだったものも起こらない』という確信だった」(“The basis of his fear, or so he himself seemed to believe, was a newly grown superstitious certainty that ‘whatever had to happen won’t happen’ as long as he and Dick ‘stick together’”)と微妙な説明をしている。つまりディックとともにアメリカに帰ることにしたのは、ディックと『一緒にいる』限り『起こるべきだったものも起こらない』という確信のためであるとペリー自身は思っているが、実はそう信じたいだけでそうではないということである。ディックと『一緒にいる』限り『起こるべきだったものも起こらない』という確信は、ペリーが自分の運命と思うものである。ペリーはその運命に従ってアメリカに戻るのだと思っている。しかしそもそもディックがアメリカに戻ることにしたのは金のためではなく、実は「ペリーの神秘的道徳的気がかり」がディックの心理に作用したためである。ディックの方がペリーに引きずられているのであって、ペリーが思っている、あるいは思おうとしているように、その逆で

はない。つまりここでのペリーは迷信あるいは運命に従っているつもりだが、実は自らの「神秘的道徳的気かり」に導かれているのである。

この「ペリーの神秘的道徳的気かり」は単なる罪悪感ではない。それはもともとペリーが持っていた宗教的傾向、あるいは救済願望である。アメリカに送るために選別していた荷物の中に、ペリーが常に持ち歩いている「ペリー・エドワード・スミスの秘密日記」(“The Private Diary of Perry Edward Smith” [146]) と題されたノートがあり、ペリーは荷物の整理をしながらそれを読み返す。それは正しくは日記ではなく、印象に残った言葉などを集めたアンソロジーのようなものだが、その最後の記載がブラックフット・インディアン酋長であったチーフ・クロウフットの言葉で、「人生とは何か。それは夜の一匹の蛍の灯火。冬のバッファローの吐く一息。それは草原を渡り、日暮れとともに消える小さな影のようなもの」(“What is life? It is the flash of a firefly in the night. It is a breath of a buffalo in the wintertime. It is as the little shadow that runs across the grass and loses itself in the sunset” [147]) というものだ。ペリーはこの言葉の「個人的意義」(“personal significance”) を強調するため赤いインクで書き、緑の星で囲っている。この言葉に表現されている一種の無常観は常にペリーの精神の根底にあったものと思われる。ペリーの迷信深さ、運命観の基礎を成しているのはこの無常観である。同時にこの無常観はペリーに神を意識させ、救いを求めさせるものでもある。旧約聖書に「伝道の書」(「コレヘトの言葉」) が含まれているのと同じ原理である。この救済願望はペリーが7歳の時、施設で彼を鞭打つなどしていた修道女たちを懲らしめ、彼を救い出してくれる「黄色い『鸚鵡のような鳥』」(“the yellow ‘sort of parrot’” [92]) となって現れ、また刑務所でウィリー・ジェイと出会い「宗教的好奇心」(“religious curiosity” [42]) に「微かに目醒めさせられた」(“slightly alerted”) ペリーに、「けっしてとても熱心とは言えないペリーの精神的探求のクライマックス」(“the climax of Perry’s never very earnest spiritual quest” [43]) に、イエスの肖像画を描かせたものである。「微かに目醒めさせられた」、「けっしてとても熱心とは言えない」などの留保が入るのは、ペリーの救済願望が常に無常観と表裏一体だからである。つまり一方のペリーのキリスト教への関心及び救済願望と、もう一方の迷信深さと運命論は、彼の精神の中心にある無常観を挟んで両極に、ちょうど対称をなすように配置されている。そのため救

済願望と運命論はペリーの精神の中で無常観を軸に容易に反転し、入れ替わる。

このことはペリーがクラッター家の人々を殺した動機について自ら語った、「多分クラッター家がその償いをするはめになったというだけなんだろうな」(“Maybe it’s just that the Clutters were the ones who had to pay for it” [290, 302]) という言葉に最もよく表れている。ペリーはこれを、拘置所を訪れたドン・カリヴァンに対して言う。カリヴァンはかつてペリーと軍隊で一緒だった男で、報道を見て拘置所のペリーに連絡をしてきたのだった。カリヴァンは今や敬虔なカトリックの信者となり、ペリーに手紙を書いたのは「神が私同様あなたを作り、私を愛するのと同じようにあなたを愛し、神の御心は測り難いがゆえ、あなたに起きたことは私に起きていたかもしれないから」(“because God made you as well as me and He loves you just as He loves me, and for the little we know of God’s will what has happened to you could have happened to me” [261]) なのだと言う。語り手によれば、ペリーはこの手紙に対し自分を思ってくれている人がいることに感謝しながらも、例によって「宗教への言及には説得力を感じなかった」(“found the religious allusions unpersuasive” [262]) という。直後に括弧に入れてペリーの言葉「信じようとしたんだ。でもだめなんだ。できない。信じるふりをしてもしようがないし」(“I’ve tried to believe, but I don’t, I can’t, and there’s no use pretending”) が挿入されているが、これはおそらくペリーが現実の著者カポーティ本人に言ったものと思われる。カリヴァンが拘置所を訪れることになったのはカリヴァンと同じカトリックのキリスト者で、拘置所の管理をしている保安官代理の妻マイヤー夫人の計らいによるもので、ペリーの「魂の救済」のため三人で食事をするようになったためである。ペリーが「多分クラッター家がその償いをするはめになったというだけなんだろうな」と言ったのは、この食事の席上においてである。この言葉にはペリーの運命観がよく表れていて、クラッター家の人々を殺すことになったのはついていない人生の果てにディックに誘われてクラッター家に押し入った自分の運命であり、またクラッター家の人々が殺される羽目に陥ったのもたまたまそこにいたクラッター家の運命であると言うのである。さらにここには運命観の根底にあるペリーの無常観が、「なったというだけ」という言い方で表現されている。

しかしこの言葉が言われた文脈、つまりそれが二人のキリスト者、特にカリヴァンに対して言われた言葉であるということに注意しなければならない。ペリーはカリヴァンの背後に神を見ている。すなわちペリーはこの言葉を神に対して言っているのである。「良心の呵責」(“remorse” [290]) はないのかとカリヴァンに問われたペリーは、それはないと否定し、「たぶん俺たち(自分とディック)は人間じゃないんだろうな。俺は俺を気の毒に思うほどには人間的だけどな。あんたは出ていけるっていうのに、俺はここから出られないっていうのは残念なことだ。でもそれだけのことだ」(“Maybe we’re not human. I’m human enough to feel sorry for myself. Sorry I can’t walk out of here when you walk out. But that’s all” [291]) と言う。「あんたは出ていけるっていうのに、俺はここから出られないっていうのは残念なことだ」というのは、カリヴァンからの手紙にあった「神の御心は測り難いがゆえ、あなたに起きたことは私に起きていたかもしれないから」を意識したものである。つまりこの言葉は「私に起きていたかもしれない」ことが実際には起きなかったカリヴァンへの当てつけではなく、それがペリーに起きるように計らった神への当てつけである。それでもペリーはそうした神の計らいも「それだけのことだ」と、無常観の中に解消しようとする。

しかしここでペリーの運命観は、それとは無常観を軸に対称的な位置にある救済願望へと反転する。語り手はペリーの「超然とした態度」(“so detached an attitude” [291]) を前に沈黙するカリヴァンを見て、「その沈黙がペリーを狼狽させた」(“his silence upset Perry”) と書いている。“upset” させた、というのは文字通り、ひっくり返したのである。続くペリーの言葉はその前のものとは明らかに違っている。まだ「嘘を言いたくないんだ。謝りたいとか、今はひざまずいて祈りたいとか、そういうのはピンと来ない。ずっと否定してきたものを一夜にして受け入れることはできない」(“Throw a load of bull—how sorry I am, how all I want to do now is crawl on my knees and pray. That stuff don’t ring with me. I can’t accept overnight what I’ve always denied”) と言いながら、「本当のことを言えば、あなたは俺にもっと多くのことをしてくれた。あなたが神と呼ぶものがしたことより、あるいはこれからすることより」(“The truth is, you’ve done more for me than any what you call God ever has. Or ever will”) とカリヴァンに感謝している。ペリーはここで遠回しに、否定神学的に、神に言及している。さ

らにカリヴァンの何に感謝しているかと言えば、「手紙を書いてくれたり、友達と署名してくれたら」（“By writing to me, by signing yourself ‘friend’”）したことだと言う。カリヴァンがしたこととはペリーに神への通路を提供したことである。カリヴァンはもともとそのつもりでペリーに手紙を書いたのだし、また会いに来たのである。ペリーも当然そのことはわかっている。というのもカリヴァンはペリーにとってウィリー・ジェイの後継者だからである。ペリーはウィリー・ジェイに対してと同様、カリヴァンにも矛盾した態度をとる。すなわちあくまでも神を突っぱねて見せているように見せながら、カリヴァンを通して神に救いを求めているのである。もともとカリヴァンから最初の手紙をもらった時、信仰には同調できないと言いながらもカリヴァンと文通を続けたのは、カリヴァンに神への通路を求めたからである。この断片の最後にペリーは見知らぬ人間に囲まれて死にたくない、死刑に言及する。そしてカリヴァンに「電球を外して割って、手首を切る。それが俺のやるべきことなんだろうな。あなたがまだここにいる間に。自分のことを少しでも思ってくれる人がいる間に」（“Just unscrew the bulb and smash it and cut my wrists. That’s what I ought to do. While you’re still here. Somebody who cares about me a little bit” [292]）と言う。カリヴァンとマイヤー夫人の信仰に照らせば自殺は容認できないが、ペリーには関係がない。ペリーにそう言わせるのは語り手が「ペリーの神秘的道徳的気がかり」と呼ぶもの、すなわち彼の救済願望であり、また目の前にいるカリヴァンの存在である。

ペリーの「多分クラッター家がその償いをするはめになったというだけなんだろうな」という言葉は、一見この小説の中でペリーが自らの犯行の動機を言い当てたこの小説のミステリーの核心のように見えているが、実はそうではなく、それ以上にペリーがカリヴァンと出会い実際に話す中で至った彼の魂の遍歴の終着点であることがわかる。このペリーの言葉はカリヴァンと話しているからこそ出てきた言葉である。この言葉においてペリーの運命観と救済願望が交差する。「その償いをしなければならなかった」（“had to pay for it”）の“it”とは、ペリーが自分の（不遇な）運命と思うものであり、同時にカリヴァンが最初の手紙で言った「神の御心」（“God’s will”）である。その場にいたのはたまたまカリヴァンでなくペリーであり、またたまたまクラッター家であったというペリーのもともとの運命観と、それはすべて神の

計らいでそうなったという、これももともとペリーにあった神への意識がここで交差している。さらにこの言葉はカリヴァンがそこにいるからこそまた別の意味を持つ。この言葉にはクラッター家が“it”（運命）の償いをするのと同時に、ペリー自身が自殺によって“it”（神に対する罪）の償いをしなければならないという、自らの贖罪の死の可能性が含意されている。後者の償いはこれを言ったペリー本人にも、これを聞いたカリヴァンにも、この時点では意識されていないようである。しかしペリーはこの言葉をカリヴァンという通路を通して、神に対して言っている。神に対して言うこと自体がこの言葉に二重の意味を持たせている。

断片はそこで途切れ、判断は読者に委ねられる。しかし「神秘的道徳的気がかり」を持つペリーに、神への通路としてのカリヴァンを前に「その償いをしなければならなかった」と言わせることで、語り手は十分にそう示唆している。そして語り手がそのように語るからこそその語り手の背後に、魂の救済のため罪を償って死ななければならないと自覚したペリーの成り行きを静観する、著者兼当事者カポーティの姿が見えてくる。語り手はペリーの「多分クラッター家がその償いをするはめになったというだけなんだろうな」という言葉をもう一度引用する。それは司法精神医学の専門家ジョゼフ・サテン博士によるペリーの殺人の動機の分析結果を、かつて博士が専門誌に発表した論文にも言及しながら、長々と開陳した後である。語り手は最後に専門家（サテン博士）と素人（ペリー）が「似ていなくもない結論」（“conclusions not dissimilar” [302]）に達した「ということらしい」（“it would appear” [302]）とコメントしている。サテン博士の分析結果とは、すなわちこの殺人は“murder without apparent motive” (301) という概念に当てはまるもので、ナンシー、ケニヨン、クラッター夫人の3人の殺害はクラッター氏を殺してしまったという理由から「論理的に」（“logically” [302]）動機づけられたものだが、最初のクラッター氏の殺害だけは「心理学的に」（“psychologically”）考えられるべきで、ペリーは犯行の瞬間「精神分裂の闇の奥深く、メンタル・エクリプスの状態にあり」（“under a mental eclipse, deep inside a schizophrenic darkness”）、その状態の下でクラッター氏はペリーにとって「何か過去のトラウマとなった人間関係の鍵となる人物」（“a key figure in some past traumatic configuration”）に見えたため、『突然、気づいた』時には殺していた」（“‘suddenly discovered’ himself

destroying”) というものだ。さらにサテン博士は、その「鍵となる人物」とは彼の父、孤児院で彼を叩いたりした修道女たち、軍隊にいた時の軍曹、カンザスに戻るなど命じた仮釈放監察官の中のいずれか一人、あるいはその全員であると論じている。

ここで語り手がペリーの分析とサテン博士の分析を「似ていなくもない」と微妙な言い方をしているのに気をつけなければならない。これは肯定的に取れば似ていないようで似ているとも取れるし、また否定的に取れば似ているようで似ていないとも取れるが、いずれにせよ語り手は二人の分析が完全に一致するとは言っていない。ただここには二人の分析が似ているとか似ていないとかいうこととは別に、語り手が読者に対して暗示するもう一つの要素がある。それは「似ていなくもない結論」に達した「ということらしい」と言う時の語り手の不確かさに表れている。「ということらしい」(“it would appear”) の “would” に表れた語り手の不確かさには、語り手の気のなさ、ペリーの言葉とサテン博士の分析を比較すること自体に対する、語り手自身のやる気のなさが表れている。もちろん語り手はノンフィクション・ノベルとして、ノンフィクションらしさを演出するために、犯罪心理の専門家の分析を参照することにそれなりの意義を認めている。しかし博士の論文を長々と引用し、さらにペリーの「多分クラッター家がその償いをするはめになったというだけなんだろうな」をもう一度引用しながら、語り手はこの比較にはもともと意味がないと言っているように聞こえる。

語り手が本当に関心があるのはこの言葉に表れたペリーの運命観と救済願望の交差であり、さらにはペリーが自らの魂の救済のため、犯した罪を償うには死ななければならないと自覚している点である。それは当然語り手の背後に隠れた著者兼当事者カポーティの関心事でもある。ここで小説の中の著者兼当事者カポーティと現実の著者カポーティがはっきりと分離する。1966年のジョージ・プリンプトン (George Plimpton) によるインタビューの中で、現実のカポーティは「ペリーは彼自身が述べた理由で彼がしたことをしたのだと思う」(“I believe Perry did what he did for the reasons he himself states” [Inge 55]) と明言し、ペリーの言葉「多分クラッター家がその償いをするはめになったというだけなんだろうな」をプリンプトンの前で暗唱しさえしている。さらにサテン博士が同じ結論に達したことにも改めて言及し、他にもいろいろな考え方があったと認めた上で、「決心しなければならなかつ

た。そして、いつものように、その一つの考え方に向かわなければならなかった」(“I had to make up my mind, and move towards that one view, always” [Inge 55]) のだと言う。このように現実のカポーティはペリーの言葉「多分クラッター家がその償いをするはめになったというだけなんだろうな」をあえてそのままペリーの動機として認め、さらにサテン博士の結論の有効性も認めている。これは小説における語り手カポーティのペリーの救済願望への洞察、さらにペリーの言葉とサテン博士の結論の比較に対するやる気のなさとは矛盾する。そもそもその場にいなかった現実のカポーティはこの言葉を誰に聞いたのか。またそのあとのペリーとカリヴァンの会話の展開を、さらには二人の複雑な感情の流れをどのように知ったのか。もちろんペリー、カリヴァン、さらにマイヤー夫人に取材してある程度は知ることができる。しかしそれにしてもペリーとカリヴァンの食事を描いた断片が帯びている強烈な感情は、語り手カポーティが全知全能の語り手の権限をもって、小説中の語りの著者兼当事者カポーティに起因するものとして語らなければありえないものである。

次の断片では最後の公判が描かれ、検察側と弁護側の最終弁論の後、陪審員の評決を受けてディックとペリーに死刑判決が下される。ここでも二つの見解、立場が比較されている。それは第一に「人間は肉体を持ち、永遠に生きる魂を持っています。人間がその魂の宿る家、神殿を破壊する権利を持っているとは思いません」(“He has a body, and he has a soul that lives forever. I don't believe man has the right to destroy that house, a temple, in which the soul dwells” [303]) と聖書に言及しながら二人を死刑判決から救おうとする弁護側と、同様に「人の血を流すものは、人によって血を流される」(“Whoso sheddeth man's blood, by man shall his blood be shed” [304]) などの聖書の言葉を引きながらも、結局「聖書を論じても得られるものはないと思います」(“I see nothing to be gained by arguing the Bible”) と言い、犯行の残虐さを扇情的に訴えることで陪審員に死刑評決を促す検察側との比較である。さらにそこに傍聴人席にいた二人の記者の相反する感想の比較が加わる。一人は裁判全体の不公平さを指摘し、恵まれない人生を送ってきたペリーへの同情を示し、もう一人は犯行の冷酷さを改めて強調する。さらにこの二人の会話を聞いていたポスト師(かつてペリーが服役していた刑務所の教戒師)の、ペリーは100%の悪人ではないという聖職者らしい人

物評と、町の住人らしい「ある陽気な男」(“a jovial fellow” [306]) の、ドク・サヴェッジ (一時期パルプマガジンで人気のあったキャラクター) ならば世界中の犯罪者に脳の手術をして犯罪をなくすだろうという、通俗的的ではずれなコメントの比較が続く。

しかし語り手はこうした様々な見解、あるいは立場の比較をしながらも、やはりあまり興味がなさそうである。評決が出て陪審員たちが戻って来た時、聞こえて来たのは遠くを走る列車の汽笛である。汽笛とともに判事の死刑判決を読み上げる声が聞こえ、語り手はその様子を「判決文に来るたびに、テイト判事はそれを暗い調子の虚ろさをもって読み上げ、それは今や消えゆこうとする列車の悲しげな汽笛とこだまし合っているようだった」(“each time he came to the sentence, Tate enunciated it with a dark-toned hollowness that seemed to echo the train’s mournful, now fading call” [307]) と表現している。語り手が本当に興味があるのは検事側と弁護側のそれぞれの理屈の是非でも、傍聴人のペリーへの同情と犯罪の冷酷さへの批判の対照でも、死刑判決の妥当性でさえなく、その死刑判決を読み上げる判事の声が去りゆく列車の汽笛とこだまし合って聞こえた、つまり同調し合って聞こえたという、傍聴席にいるはずの著者兼当事者カポーティにとっての主観的な出来事である。特にこの文章の後半に表れている“mournful”で、“fading”であること、悲痛でありながら、消えていくということ、この感じこそが語り手の最大の関心事である。ディックとペリーに死刑判決が下ることは記者の一人が言うように初めから分かっている。精神鑑定も、裁判自体も、その意味では茶番である。ペリーの犯行の動機さえもどうでも良い。小説のこの第4章で二人が死刑にいたる過程を事実を羅列する形で一見淡々と描きながら、上の文章に見られるように、語り手はこっそり著者兼当事者カポーティの感情を紛れ込ませる。その感情は悲しさ、痛ましさ、儚さが入り混じったものであり、それは著者兼当事者カポーティによってディックではなくペリーに対して、特に死ななければならないと自覚しているペリーに対して感じられたものである。

このペリーに対する感情は直接、語り手の口からそれとして表現されているわけではない。語り手は単に汽笛の聞こえ方を述べただけである。注意しなければならないのはこの感情を感じたのは語り手ではなく、あくまでもこの裁判を傍聴しているはずの著者兼当事者カポーティであるということだ。

それは小説中の著者兼当事者カポーティであり、実際に裁判を傍聴した現実のカポーティではない。著者兼当事者であるカポーティの感情は常に語り手カポーティによって間接的に、婉曲的に表現される。その間接性、婉曲性は語り手カポーティが語る出来事の場に、実際にはそこにいるはずの著者カポーティの姿が見えないということ、言い換えれば、語り手カポーティの語りから、著者でありかつ又当事者であるはずのカポーティの姿が隠されているということ、から生じるものである。

上の断片に続く次の断片は死刑判決を受けて拘置所に戻って来たペリーの様子を描いたものだが、その場にいたのは語り手自身ではなく、拘置所で彼の世話をしたミセス・マイヤーである。語り手は一週間後に彼女がその様子を「ある友人」(“a friend” [307]) に話しているのをまれ聞いたものとして書いている。この友人とはカポーティのことなのかもしれないしそうでないかもしれないが、この段階ではわからない。ミセス・マイヤーによれば拘置所に戻ったペリーは泣いていたという。ミセス・マイヤーは彼を見なくてすむようにキッチンにいて、彼の泣くのが聞こえたのでラジオをつけたが、やはり聞こえたのだという。しかもペリーは「子供のよう泣いていた」(“Crying like a child” [308])。ミセス・マイヤーはペリーの所に行き、独房の格子越しに伸ばしてきた彼の手を握る。するとペリーは一言「恥ずかしさでいっぱいです」(“I’m embraced by shame” [307]) と言ったという。さらにこの断片の最後で、刑務所に移るため拘置所を去るペリーとの別れについて、ミセス・マイヤーは「辛いのはさよならを言う時でしたよ。彼がどこへ行って、どうなるか分かっていただけにね」(“The bad part was saying goodbye. When you knew where he was going, and what would happen to him” [308]) とその「友人」に語る。ここで語り手はミセス・マイヤーの感情に巧みに自らの感情を重ねている。さらに語り手はペリーになついていたリスにまで自分の感情を重ねている。ミセス・マイヤーはその「友人」に、独房の格子越しにペリーに会いにきていた「あのリス」(“That squirrel”) のことを話す。このリスを互いに既知のものとして話していることから、この時点でこの「友人」とは拘置所を度々訪れていたカポーティのことであるとわかる。さらに度々ペリーを訪れていた友人として、リスと「友人」は語り手によって比喩的に同格に扱われていることがわかる。従ってミセス・マイヤーが「ペリーのあのリス、彼はきっとペリーがいなくて寂しがらるわ。彼を探していつ

も来ていたから。私も餌をあげようとするんだけど、私にはなつこうとしないの。彼が好きだったのはペリーだけだったのね」(“That squirrel of his, he sure misses Perry. Keeps coming to the cell looking for him. I’ve tried to feed him, but he won’t have anything to do with me. It was just Perry he liked”) と言う時のリスの寂しさは、カポーティ自身の寂しさであると察せられる。もっとも現実に拘置所を訪れていたカポーティがその寂しさを感じたかどうかはわからない。ここでリスと比喩的に同格に置かれた「友人」カポーティとは、あくまでも語り手が語る小説中の著者兼当事者カポーティである。語り手カポーティはその著者兼当事者カポーティの感情をミセス・マイヤーの語るリスに委ねながら、最終的に死刑に至るペリーへの惜別の情を、既にこの段階で、つまり死刑執行を待たずに先取りする形で表現している。⁵

この小説の中で語り手を通してであろうと、名のある登場人物を通してであろうと、匿名の登場人物を通してであろうと、あるいは動物を通してであろうと、著者兼当事者カポーティがペリーに対する惜別の情を表しているのはここだけである。著者兼当事者カポーティはペリーが死刑判決を受け拘置所を去る時点で、早々と彼に別れを告げたことになる。この後ペリーが実際に死刑執行されるまで約5年間あるにもかかわらず、である。このことは小説のこの後の展開に大きな意味を持つ。というのも伝記が伝える現実のカポーティはこの後まだ何度かペリーと会っているからである。カポーティは賄賂を使ってまで刑務所に収監されたディックとペリーに会いに行っていたし、また最後の処刑にも立ち会っている。ジョージ・プリンプトン (George Plimpton) の本の中で『冷血』を担当した編集者ジョー・フォックス (Joe Fox) の伝えるところによれば、カポーティはディックとペリーが求めてきた最後の面会を涙を流しながら「できない」(“I just can’t do it”) と断り続けた末にようやく応じ、「絞首刑の最後までいるのに本当に助けを必要とし」(“He really needed help to get through the hanging”) ながら立ち会ったのだという (Plimpton 179)。しかし小説の中にはそうした感情的に混乱する現実のカポーティの姿はない。語り手が語るのは死刑判決を受けた二人を、特にペリーを、ただ静観する著者兼当事者カポーティの姿である。その語り手の語る著者兼当事者カポーティは、ペリーは死ぬべきであると感じている。その感情は伝記上のカポーティが、本を出版したいがため死刑を望んでさえ

いたというのとは全く違う。確かに二つの感情はよく似ている。もし著者兼当事者カポーティと伝記上のカポーティを区別しなければ、おそらく二つの感情は区別できないだろう。著者兼当事者カポーティがペリーは死ぬべきであると感じているのは「神秘的道徳的気がかり」に導かれるペリーの姿を見てきた後で、死刑判決を受けたペリーがその死刑による死を受け入れていることを直感的に知っているからである。

著者兼当事者カポーティは「ある友人」としてまた別の現れ方をする。刑務所へ移された後、ペリーはあることをきっかけに生きる意欲を失い、食事に手をつけなくなる。ペリーは小学校しか行っていないにもかかわらず、以前からディックに対し自分の教養を自慢し、ディックの話し方の文法や発音の間違いなどを指摘していたが、大学生の死刑囚アンドルーズが入ってきてペリーの言い間違いを正すようになったのをきっかけに食事を取らなくなり、誰とも口をきかなくなる。病院に移されてから数週間後、夢にうなされて目を覚ましたペリーに、刑務所長が一枚の絵葉書を渡す。それはペリーの父から刑務所長に宛てた絵葉書で、ペリーが収監されていることを初めて知った父親が面会が可能かどうか尋ねてきたものだった。ペリーはすぐさま絵葉書を破り捨てる。語り手は「その手短で素っ気ない文面が彼を感情的に蘇らせ、愛と憎しみを復活させ、そして彼がそうでないように努めてきた状態にまだあることに気づかせた、すなわち生きているということに」(“the few crude words had resurrected him emotionally, revived love and hate, and reminded him that he was still what he had tried not to be—alive” [320]) と解説している。さらに語り手は後にペリーが「ある友人」(“a friend” [320]) に書き送ってきたという手紙を紹介している。その中でペリーは、「自分はまだ生きているべきだ」(“I ought to stay that way”) と決心したと、そして「私が死ぬのを望んでいる者を私の方から手伝ってやることはありません。彼らは自分で戦わなければならないでしょう」(“Anybody wanted my life wasn't going to get any more help from me. They'd have to fight for it”) と書いている。

ここでペリーはまだ生きたいと、そして自分の死を望んでいる者を自分から手伝うようなことはもうしない、と言う。これは本の出版のためディックとペリーの死刑執行を望んでいた伝記上のカポーティにとって、痛烈な皮肉に聞こえたはずである。しかし小説中の著者兼当事者としてのカポーティに

としてはそうではない。小説中のカポーティは既にリスの姿を借りて、惜別の情とともにペリーに別れを告げている。それは上で述べたように、ペリーの人生行路に対する彼の根本的な洞察に基づいてなされたものである。ペリーの人生がひたすら死刑に向かっていることを、そして何よりもペリー自身が自分は死ななければならないと自覚していることを、小説中の著者兼当事者カポーティは知っているのである。従ってここでペリーの生きたいというという言葉を読んでも、著者兼当事者カポーティはただ静観するだけである。語り手カポーティもそのように語っている。ペリーの「友人」への手紙の「彼らは自分で戦わなければならないでしょう」という言葉を引いた後のこの断片の最後の段落では、ペリーが14週間ぶりにミルクを飲み、徐々に体重を戻し、ついに独房に戻る様子が描かれている。帰ってきたペリーにディックは笑いながら「おかえり、ハニー」(“Welcome home, honey” [320])と声をかける。この場面の明るさにはもちろん影が含まれている。ペリーは生に復帰したのではなく、死刑に向かう既定路線に復帰しただけだからである。そう思えるのは小説の著者兼当事者カポーティであり、死刑になるかどうか心配していた伝記上のカポーティではない。これを語っているのは語り手のカポーティであり、彼は全てが終わった後で全知全能の語り手として何でも語れる立場にいる。もしディックの「おかえり、ハニー」を伝記上のカポーティが書いたとしたら、それはペリーの「私が死ぬのを望んでいる者を私の方から手伝ってやることはありません」という皮肉に対するお返しの皮肉になってしまう。全能の語り手カポーティであればそのような皮肉の応酬に囚われる必要はない。伝記上のカポーティとは違い、語り手カポーティにとってはペリーの「私が死ぬのを望んでいる者を私の方から手伝ってやることはありません」は皮肉ではない。語り手の背後にいる著者兼当事者カポーティはペリーの死を望んでいるわけではないからである。

二人の死刑が執行されたことを告げる短い断片(小説の最後から二つ目の断片)の一つ前の断片に、「あるジャーナリスト」が刑務所を訪れ、ディックと面会したエピソードが語られている。ディックがそのジャーナリストに対し「ペリーに会いに来るのはあなたの他にいない」(“Nobody ever comes to see him except you” [335])と言っていることから、読者はこのジャーナリストがカポーティのことであると容易に推測できる。しかしここにはなぜかディックとの面会だけしか描かれていない。語り手はペリーとの面会につい

ては語っていない。それはこのジャーナリストが現実のカポーティではなく、小説中の著者兼当事者カポーティだからである。「あるジャーナリスト」はディックがペリーの悪口を言うのを黙って聞いている。悪口の途中でディックが「ペリーに会いに来るのはあなたの他にいない」と言ってそのジャーナリストにうなずいて見せるところで、語り手はそのジャーナリストは「ヒコックと親しいのと同じくらいスミスとも親しかった」(“who was as equally well acquainted with Smith as he was with Hickock”)と付言する。この簡単な付言があることで、ペリーとも会っていたはずの著者兼当事者カポーティの存在が浮かび上がる。それは実際にペリーに会っていた現実のカポーティではなく、あくまでも語り手が言葉で小説中に喚起する著者兼当事者カポーティである。ペリーとの面会が描かれないことで、著者兼当事者カポーティが小説中の、言い換えれば、言語上の存在であることがわかる。ディックはペリーについて最後に「時々ペリーがかわいそうになる。あいつは今まで生きてきた人間の中でもっとも孤独な人間の一人に違いない。しかし、だ。ちくしょう。それもほとんどはあいつ自身のせいなんだ」(“Sometimes you got to feel sorry for Perry. He must be one of the most alone people there ever was. But. Aw, the hell with him. It's mostly every bit his own fault”)と言う。ディックはペリーを哀れんでいる。しかしディックのペリーへの哀れみはすぐにディック自身に跳ね返り、ディックに「あいつ自身のせいなんだ」と言わせている。ディックは今自分が死刑を待つ身になったのはペリーの“fault”だと言っている。ディックの言うペリーの“fault”とはかつてディックにも感染し、そのことを語り手カポーティが指摘した「ペリーの神秘的道徳的気がかり」のことである。ディックはもちろんそれを「神秘的道徳的気がかり」とは呼ばない。しかし今ディックと話している著者兼当事者カポーティはそうとわかっている。この場面では語り手の言う「ペリーの神秘的道徳的気がかり」は、小説の中の登場人物としてのペリー、ディック、著者兼当事者カポーティを結びつける共感覚として機能している。

確かにディックの言う通り、今二人が死刑を待つ身になったのはディックの言うペリーの“fault”、すなわち語り手の言う「ペリーの神秘的道徳的気がかり」のせいである。このペリーの「神秘的道徳的気がかり」は犯行の現場ですでに、ペリーが自分自身を見る目として起動していた。ラスヴェガスで逮捕されガーデンシティまで護送される車の中で捜査官のリーダーである

アルヴィン・デューイに対し、ペリーは自ら犯行の模様を詳細に語る。その中でペリーはクラッター氏の娘ナンシーの財布からこぼれ落ちた一ドル銀貨を腹ばいになってまで拾おうとしている自分に嫌気がさし、「自分が自分の外にいるみたいだった。何かいかれた映画に出ている自分を見ているような」(“it was like I was outside myself. Watching myself in some nutty movie” [240])と感じ、気分が悪くなったという。この「自分が自分の外にいるみたい」という感覚、これはペリー自身が運命と思うものによってディックとともに犯罪に巻き込まれようとする中で初めて感じた「神秘的道徳的気がかり」である。この時ペリーは確かに彼自身が言うように「自分を見ている。」この直後、ペリーは盗んだラジオと双眼鏡をひとまず車に置いたため家の外に出るが、風と寒さを心地よく感じ、月が明るく遠くまで見渡せ、「このまま歩き去ってしまっただろうか」(“Why don't I walk off?” [240])と思ったという。だが運命に導かれるかのようにペリーは家に戻ってしまう。ペリーは護送車の中でデューイに「きつとイエス様は俺があの家に戻ることを望んでなかっただろうな」(“I sure Jesus didn't want to go back in that house”)と言う。

「神秘的道徳的気がかり」はペリーがクラッター氏を殺す場面でも、ペリーが自分を見る目として働く。初めから全員を殺すと息巻いていたディックと違い、ペリーにはもともと殺意はなかった。だが結局ペリーが四人を殺す口火を切ることになる。デューイにペリー自ら語った犯行の様子からは、ペリーがクラッター氏を殺したのは単に一時的な衝動に駆られてのこのように見える。だがそこにはそこに至るペリーの感情の流れがある。ペリーは知らなかったが、ディックの犯行の動機にはもともとクラッター家の娘をレイプしたいという欲望が含まれていた。そうしたことの嫌いなペリーは実際ナンシーをレイプしようとしたディックを制止し、厳しく咎める。「俺たちの間には険悪な感情があったんです」(“There were hard feelings between us” [244])と言うように、そのことで二人の間がぎくしゃくする。ペリーは「こんな奴を崇拜し、こいつのはったりを真に受けていたかと思うと腸が煮えくり返るようでした」(“it made my stomach turn to think I'd ever admired him, lapped up all that brag”)と言う。勇ましいことを言っていたディックの本当の狙いがナンシーであったことを知って失望したペリーは、当てつけにディックに皆殺しにするようにけしかける。ためらうディックからナイフを取ると、ペリーは自らクラッター氏を殺そうとひざまずく。しかしペリー

は「そのつもりはなかった」(“I didn’t mean it”)ののだと言う。ただ「あいつのはったりを暴いて、俺を止めさせようと、あいつが偽者で臆病者だと認めさせようと思った」(“I meant to call his bluff, make him argue me out of it, make him admit he was a phony and a coward”)ののだと言う。ここでペリーのディックを見る視線がペリー自身に跳ね返る。ひざまずいたペリーの脳裏を一ドル銀貨を拾おうとした時の記憶がよぎる。ペリーはデューイに「俺はあのいまましい金のことを思ったんです。銀貨。恥ずかしさ。嫌悪。しかもカンザスに戻らないように言われていたのに」(“I thought of that goddam dollar. Silver dollar. The shame. Disgust. And they’d told me never to come back to Kansas”)と言う。ペリーはこの瞬間、運命に翻弄される自分の姿を見ている。ウィリー・ジェイに会うためにカンザスに戻ったにもかかわらず、結局ディックとクラッター家に押し入ることになり、今クラッター氏を殺そうとしている自分の身体を外から見ている。ペリーの身体は運命に従って動いているが、「神秘的道徳的気がかり」としての自分は運命の流れから逃れ、自分を見ている。悲鳴が聞こえるまで、ペリーは自分が既にクラッター氏に手をかけたことに気づかなかったと言う。

語り手の言う「ペリーの神秘的道徳的気がかり」の起源は、犯行前のペリーが自分自身を見た目にある。「神秘的道徳的気がかり」に導かれるペリーの姿を静観する著者兼当事者カポーティの目は、もともと自分自身を静観するペリー自身の目である。だからこそその著者兼当事者カポーティの目は、小説の最後でペリーの死とともに消えざるを得ない。自分自身を静観するペリーを見る著者兼当事者カポーティの目は、語り手カポーティによって、物語の終わりとともにその退場を告げられことになる。

Ⅲ.

小説の最後の場面はディックとペリーの死刑執行の一年前、デューイがクラッター家の墓前で殺されたナンシーの友人スーザンに会う場面で、デューイは目の前で吊るされたペリーの姿を見ながらこの時のことを回想する。しかしこの回想は全くのフィクションであることがわかっている。⁶死刑執行の場面はこの回想の直前にあり、ペリーは「私がしたことについて謝罪しても意味がないかもしれません。不適當でさえあるかもしれません。でもそうします。謝罪します」(“It would be meaningless to apologize for what I did.

Even inappropriate. But I do. I apologize” [340]) と最後に言って、死んでいる。⁷ この場に実際にいたはずの現実のカポーティは例によって描かれていない。死刑執行の場面とクラッター家の墓前の回想された場面は同じ一つの断片の中に続けて描かれていて、これがこの小説の最後の断片である。この断片は「デューイは二人が死ぬのを見た」(“Dewey had watched them die” [337]) で始まる。過去完了形になっているのは、この前の断片の最後で、すでに二人が処刑されたことが伝えられ、デューイがそのニュースを朝刊で見る場面が描かれているからである。つまりこの小説の最後の断片はその全体がデューイの回想であり、さらにその後半の墓地の場面はデューイの回想の中の回想ということになる。なぜこの小説はこんな終わり方なのか。しかもなぜ最後はペリーの死ではなく、それについてのデューイの回想でもなく、デューイの回想の中の回想、しかも見え透いた偽りの回想なのか。⁸

現実の著者カポーティがなぜこのような結末を書いたかは別として、語り手カポーティがこのような結末を語ることによってある特別な効果が生まれる。それは全知全能の語り手カポーティを残して、著者兼当事者カポーティが消えるということである。最後のデューイの偽りの回想は、デューイと親しくなり彼に会って取材した現実のカポーティでは知りえない、語り手カポーティだけが知っている架空のエピソードである。最後のエピソードの場は完全に架空の場であり、それを語る語り手カポーティも架空の存在であり、その語り手が語る語りの中の著者も架空の著者カポーティということになる。ただし架空の著者兼当事者カポーティはこの場にはもういない。著者兼当事者カポーティの目はペリーを静観していた目であったがゆえに、言い換えれば、それは語り手がペリーについて語る語りが生んだ一つの効果に過ぎなかったがゆえに、ペリーの死とともに消えている。

注

1. ジョージ・プリンプトン (George Plimpton) の本にも、ネッド・ロレム (Ned Rorem) の証言として、カポーティが「彼らが処刑されるまでそれは出版できない。だから待ちきれない」(“But it can't be published until they're executed, so I can hardly wait” [Plimpton 215]) と言った、とある。
2. 伝記に描かれたカポーティは現実のカポーティとは違うが、本論では伝

記に描かれたカポーティを現実のカポーティと呼ぶことにする。

3. クリス・アンダスン (Chris Anderson) は『冷血』における「著者の沈黙」 (“the authorial silence” [77]) について論じているが、これは本論でいう著者兼当事者カポーティの静観とは全く違う。アンダスンが沈黙と言うのは単に作家のレトリックとしての「それとなく言うこと、抑えて言うこと、言わないこと」 (“implicitness, restraint, withholding” [84]) だが、これは本論では語り手カポーティの語り方に属する。本論ではその語り手の語りの中で、語り手の背後から、著者兼当事者カポーティが死にゆくペリーを静観していると論じている。
4. この「ペリーの神秘的道徳的気がかり」というモチーフには、フラナリー・オコナー (Flannery O'Connor) の影響が窺われる。『冷血』へのオコナーの影響については Gentry が詳しく論じている。
5. ラルフ・ヴォス (Ralph F. Voss) によると、マイヤー夫人は後に、泣いているペリーに手を差し伸べて云々という出来事があったことを否定し、カポーティにそんなことを話した覚えもないと語ったという。しかしカポーティのフィールド・ノートにはこの出来事は記されているらしい (Voss 86)。この出来事はカポーティの創作と考えられる。
6. Clarke 358-59。
7. ペリーの処刑を見た二人の町の者の証言によると、カポーティは処刑の場にはいたが、離れたところにて、ペリーが最後に何を言ったか聞こえたはずがないという。またその二人もペリーの謝罪は聞かなかったという。さらにその場にいたデューイも謝罪があったかどうか覚えていないという (Voss 86)。ペリーの最後の謝罪はカポーティの創作の可能性が高い。
8. ジョン・ホロウェル (John Hollowell) はこの最後の場面がとりあえず終結感 (a sense of closure) を与えることを認めた上で、小説全体は「合理的で、全体としてまとめられ、完成されたより大きな枠組み」 (“a larger framework that is rationalized, totalized, and complete”) を拒んでいると論じている (144-46)。

引用文献

- Anderson, Chris. "Fiction, Nonfiction, and the Rhetoric of Silence: The Art of Truman Capote." Bloom, *Bloom's Modern Critical Views: Truman Capote*, 77-86.
- Bloom, Harold, ed. *Bloom's Modern Critical Views: Truman Capote*. Broomall, PA: Chelsea House Publishers, 2003.
- . *Bloom's Modern Critical Views: Truman Capote, New Edition*. New York: Infobase Publishing, 2009.
- Capote, Truman. *In Cold Blood*. 1965. New York: Vintage International, 2012.
- Clarke, Gerald. *Capote: A Biography*. 1988. London: Abacus, 1993.
- Gentry, Marshall Bruce. "He Would Have Been a Good Man: Compassion and Meanness in Truman Capote and Flannery O'Connor." Bloom, *Bloom's Modern Critical Views: Truman Capote, New Edition*, 135-49.
- Guest, David. *Sentenced to Death: The American Novel and Capital Punishment*. Jackson: UP of Mississippi, 1997.
- Hickman, Trenton. "'The Last to See Them Alive': Panopticism, the Supervisory Gaze, and Catharsis in Capote's *In Cold Blood*." Bloom, *Bloom's Modern Critical Views: Truman Capote, New Edition*, 121-34.
- Hollowell, John. "Capote's *In Cold Blood*: The Search for Meaningful Design." Bloom, *Bloom's Modern Critical Views: Truman Capote*, 129-47.
- Inge, M. Thomas. *Truman Capote: Conversations*. Jackson and London: University Press of Mississippi, 1987.
- Plimpton, George. *Truman Capote: In Which Various Friends, Enemies, Acquaintances, and Detractors Recall His Turbulent Career*. New York: Nan A. Talese, 1997.
- Voss, Ralph F. *Truman Capote and the Legacy of In Cold Blood*. Tuscaloosa: The University of Alabama Press, 2011.